上品野E窯跡（かみしなのいーかま）

所　在　地　瀬戸市上品野町
（北緯35度15分24秒 東経137度08分19秒）

調査理由　道路改良工事国道363号

調査期間　平成22年4月～平成22年7月

調査面積　360㎡

担　当　者　小澤一弘・武部真木

調査地点（1/2.5万「多治見・猿投山」）

調査の経緯と経過　国道363号道路改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じて委託を受け発掘調査を行った。調査面積は360㎡である。

立地と環境　遺跡は瀬戸市北東部品野地区の北東丘陵部にあり、同事業により中世・戦国期にかけての平山城、桑下城跡の発掘調査（平成20年度）が行われた際に新規に発見された。東西方向に細長い標高200m前後の丘陵尾根を利用した城跡の範囲ではやや西寄りの部分にあたり、城跡の北側を画する北向き斜面に窖窯１基と前庭部平坦面、土坑、排水溝、そのほか縄文時代の陥し穴１基を確認した。

調査の概要　窯体の規模は全長9.16m、焼成室最大幅2.35mを測り、焚口は撹乱を受けていたものの、天井とダンパーの一部が検出されるなど遺存状況は比較的良好であった。焼成室天井は分炎柱のすぐ後方からの大部分が残っており、斜度20°から40°近くにもなる床面に高さ1m弱の空間が確保されていたことが観察できた。壁面は地山掘抜きのままで修復痕はみられず、床下は少なくとも２次の改修痕が確認できた。また東側壁際の溝（020SD）は暗渠状となっており、窯構築時に排水用に設けられたとみられる。前庭部は幅約3.2m、主軸方向に約8mの範囲の平坦面が造られ、東側に土坑（017SK）、排水溝（014SD）が設けられていた。調査区付近の旧地形は、西に開口する谷状地形であったと推定でき、この窯にともなう灰原は、調査範囲外の北西側に続くものと予想される。

そのほか、尾根頂部から北側に少し下った地点で見つかった土坑（009SK）は長軸1.65m、短軸1.42m、深さ1.67mであり、底面に直径15cm程度の小ピットをもつ。桑下城跡の調査においても同様の規模の土坑が多数検出されており、構造や配置などから陥し穴と推定されている。

出土遺物　出土遺物は山茶碗、小皿、焼台を中心に須恵器壺片、石器（チャート剥片）などコンテナ約40箱がある。遺物の出土状況をみると、窯体内には側壁に寄せるように大量の焼台が残され、前庭部左側にかけての範囲では逆に焼台は少なく、大量の山茶碗・小皿が廃棄されてあった。最終操業時の窯出しから検品、選別へといった一連の作業の流れが窺われる。

重ね焼きの際の山茶碗・小皿の蓋（最上部）、台（最下部）、破損・溶着品の分炎棒への利用など、窯道具あるいは窯構造物の一部としての再利用が確認できる資料も多く、調整具とみられる加工痕のある陶器片では前庭部排水溝で３点がまとまって出土した。

まとめ　上品野E窯跡は尾張型山茶碗第8～9型式、14世紀前葉を中心に操業していた山茶碗専焼窯であり、これまでに知られている尾張型山茶碗の窯跡分布域では、最も北東に位置する窯跡となった。水野川をはさんで南側の丘陵部には続く時期の中洞窯跡、宇トゲ窯跡（いずれも古瀬戸を併焼）があり、桑下城が構築される以前の付近の様相を伝える資料としても注目される。（武部真木）

完掘状況（北から）

陥し穴 009SK 完掘状況（北東から）

主要遺構配置図（1:150）